

2015 年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は 2015 年 6 月 18 日（木）より 8 月 5 日（水）まで実施した。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に 2 年から 3 年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望であり上級日本語の集中的教育を受けることを熱望しながら、様々な事情で年間コースへの入学が困難な学生が多い。そこで、そのような年間コース潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている¹。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段は海外、主に米国で教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、スワスモア大学、デューク大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の教員が参加した。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は 39 名（うち、家庭の事情により中途退学した大学院生が 1 名）であった。その内訳は、大学院生 27 名、大学学部生が 4 名、大学卒業後進学予定の学生が 2 名、社会人が 6 名である。受講者は、コース初日の試験により判明した習熟度や得手不得手の傾向に応じて、6 つのクラスに分けられる。各クラスは学生 5～7 名で、1 名の担任と、1 名もしくは 2 名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち5名は「サマー・レコメンデッド」（年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）であった。しかし、サマー・レコメンデッドのためだけのクラスを設置することはなく、クラス判定は他の通常受講者との区別なしに初日の試験の成績に基づいて行った。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、全てのクラスにおいて、学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材を用いた聴き取りと内容報告の練習、日本語教科書や新聞、雑誌、書籍を用いた読解練習とそれを通じた語彙・表現力の増強、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』(The Japan Times)を用いた敬語の習得訓練が行われる。作文の宿題も定期的に課される。また、日本文化と社会を体験できる機会(校外学習)も5回設けられている。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会を開く。本コースは成績や単位を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行う。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話しそして聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるといふ大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間(校外学習を除く)の中でどの技能にどの程度の時間をかけるか、教材として何を用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が主体的に決定している。教育内容はコース開始前に計画されるが、クラスに割り当てられた学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整が行われる。

また、学生1人あたり全コースを通じて1時間、通常授業の時間枠の中で教員との個人授業の時間を設けている。個人授業は、クラス担任が学生と1対1で接し、学生の個別のニーズに合わせた活動を行う目的で設置したものである。学生1人あたり1時間というのは、教員から見れば授業8時間分ということである(1クラスを学生8名とした場合)。ある学生が教員の指導を受けている時間、他の学生は自習をする。この学生にとっての1時間、教員にとっての8時間をコースの中でどう配分し、その時間で何をするかはクラス

の担任がそれぞれのカリキュラムや学生の要望に応じて決定している。例えば後述の「夏鳥」クラスでは1人10分ずつの面談を5回行い、コース開始時には学習目標の聴き取り、中盤には中間試験のフィードバック、終盤には期末発表のための準備に活用した。

このほか、大学生インターン（横浜国立大学、フェリス女学院大学）の協力を得て、授業時間外に自由会話の時間を設けた。学生は2週間に1度程度、3～5人が1組となり、授業とは異なって緊張感のない自由な会話を自分と近い世代の大学生と楽しむことができた（1回の時間枠は1組あたり30分）。自由会話に協力してくれたインターン生には、この場を借りて深く感謝を申し上げる。

校外学習の詳細等、上記以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースは2～3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様であり、前節4-1で述べた全クラス共通の活動を行う際、読解教材のレベルや量などはクラスごとに異なる。また、文法の扱い方もクラスにより差がある。本節では、筆者が講師として参加した「夏海」クラスの授業の実例を参考までに挙げる。「夏海」は本コースで最上級のレベルであるが、日本語学習の目的は学生によって大きく異なっていた。たとえば、アカデミックな議論ができるようになることを目指す、本センターの学生として典型的な博士課程の大学院生と、日系企業で通訳として8年勤務した経験があり、工場内の機械が作動する様子を日本語で的確に説明できるようになりたいという目標を持つ社会人が「夏海」には所属していた。したがって画一的なクラス目標を設定することは困難であったが、基本的な文法ミスを減らし、膨大な中・上級文型の使い方を練習すること、幅広い分野にまたがる語彙力を身につけること、口頭や電子メールでの待遇表現の適切な使用方法を学ぶことは全学生にとって必要であり、これらをクラスの目標として設定した。宿題の多いクラスであったが、学生は最後まで高い学習意欲を維持し、また極めて協力的な態度をもって学習を進めた。

1 時間目（9:40～10:30）

- ・ 単語クイズ（各週初日のみ）：前週に扱った読解教材等に含まれる単語の読み方や例文を書かせる。
- ・ 一分間スピーチ：クラス全員が行う。学んだ単語や文型をできるだけ使い、自分の専門に関わる話題や日々のニュースについてなど、学生が自由に選んだテーマで、簡潔に話をまとめる。
- ・ ニュース報告：前日の「NHK ニュース7」で報じられたニュースの1つを1名が報告し、クラス全員でそれについて意見を述べ合う。
- ・ 文法：牧野・筒井『A Dictionary of Advanced Japanese Grammar』を全て読み、学生から

質問が出た、あるいは教員が重要と考えた文型について、クラスで例文を作る。1日あたり3～40ページ程度の予習が必要であった。この本が一通り終了したあとは、友松・福島・中村『新完全マスター文法 日本語能力試験 N2』（スリーエーネットワーク）を用いて文型の例文を作る練習と確認テストを行った。

2 時間目 (10:40～11:50) 2

- ・多読（月曜・火曜）：1日あたり数ページ～10ページ程度の記事を予習し、授業では内容を自分の言葉で簡潔に説明する。扱った記事は、西山・平畑（編）『「グローバル人材」再考』（くろしお出版）より、西山教行「私事化する教育と言語教育の可能性—グローバル教育に欠けるものは何か」、岩間・佐藤・坂口（編）『ちくま評論選—高校生のための現代思想エッセンス』（筑摩書房）より、大澤真幸「巫女の視点」、等。
- ・精読（水曜・木曜）：読み進めるのは1日あたり数段落～数ページ程度で、難読箇所の意味や筆者の意図を細かく確認したり、重要表現や文型の例文を作ったりする。扱った記事は、東京大学AIKOM日本語プログラム・近藤・丸山（編著）『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）より、野崎歓「村上春樹さん『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の題は訳さないのですか?」、村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社）より「かえるくん、東京を救う」、等。
- ・文法集中・新聞（金曜）：『日本語文法セルフマスターシリーズ』（くろしお出版）等の市販参考書を用いた初級文法の復習と、最新の新聞記事の速読練習。

3 時間目 (12:00～12:30)

- ・待遇表現：前述の『待遇表現』テキストを用いた待遇表現の練習や、電子メールの書き方の練習。メールに関しては、各学生が「自分が実際に経験した、あるいはしそうな状況」を設定し、その設定に従って書く練習をした。表現の参考として、梁・大木・小松『日本語Eメールの書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた。

4 時間目 (13:30～14:20)

- ・評論（月曜・火曜）：担当者が文藝春秋『論点100』シリーズから選んだ記事をクラス全員が読んでおき、それについて討論を行う。担当者は討論を主導する。
- ・専門発表あるいは議論（水曜・木曜）：「専門発表」では、一人が自分の専門について発表し、他の学生の質問に答え、意見交換をする。発表の長さは30分までとし、原稿は作成せず、アウトラインのみを手元に用意して話す。「議論」では、一人が論争の対象になりやすい話題と論点を紹介した上で、クラス全員でそれをめぐって意見を述べ合う。反論の際は自分と意見を異にする学生に対して失礼のないように言い方に配慮しなければならない。話題を選んだ学生は司会となって議論を主導した。

- ・ 校外学習（金曜）：稿末の資料を参照。ただし、最後の金曜日は通常授業とし、試験と口頭発表会のための準備にあてた。

週末の課題

毎週末に二つの作文を課した。その週に扱った読解教材に関する 1000 文字以内の意見文と、自由な内容の 1000 文字以内のエッセイである。

4-3 他 5 クラスの概略

本節では、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏草」

大学院生か、あるいは大学院に進学を希望する学生が集まった。そのため、アカデミックな議論に必要な表現や漢字語彙、そして非礼にならずに自分の意見を表明できる適切な待遇表現を身につけることを目標とした。

入学時の学生たちは、初級文法はほぼ定着していたものの、語彙力・表現力はまだまだ大学院生として不十分であった。そこで、先述の SKIP プログラムを用いて漢字の書き方と単語の例文作りを毎日の授業冒頭で行った。読解教材としては上述『文化へのまなざし』のほか、安部公房「棒」、東浩紀「人文系が語るネット」 (it.nikkei.co.jp) などを扱った。

「夏柳」

初級・中級文法の定着が不十分であり、日常的なやりとりはできても込み入った意見をまとめて述べることはまだまだ難しい、という傾向の学生が集まった。読解教材としては上述の『文化へのまなざし』を扱い、中級・上級レベルの読解ならびに文法の学習を行ったが、基本文法の定着があまりに不十分だったため、本センター作成の『文法ノート』を急遽用いて初級文法の復習を行った。

学生たちは文法の運用や読解の正確さを高めることに苦労したものの、自らの好奇心に基づいた口頭での活動、たとえば校外学習の訪問先について事前に調査したことを発表し、意見交換するなどの活動には積極的であり、クラスは常に活気があった。

「夏山」

読解力に比して会話能力が著しく低い学生を集めた。読解教材はアカデミックジャパニーズ研究会（編著）『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』（アルク）や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌や書籍から抜粋した生教材も用いた。しかし学生たちは、これらの文章を理解し、それについて意見があっても、言葉が出てこなかった。担任は昨年同様の授業計画を立てていたが（[昨年度の夏期コース報告](#)を参照）、予定

を大幅に変更して読解教材の分量を減らし、意見を述べる活動により多くの時間を割いた。学生を発言させることに力を注いだ結果、コース終盤には授業内で学生同士の活発な質疑応答や意見交換が見られるようになった。期末発表会でも学生は自分の言葉で専門について語るなどの上達ぶりを示した。

文法に関しては、担任が独自に編集した初級文法の解説と練習問題を用い、毎日初級～中級文法の復習を行った。

「夏鳥」

夏鳥クラスの学生の日本語能力は総じて初級修了から中級初期程度といえる。基礎を固め、その上に高度な日本語運用能力を積み上げていくことが本クラスの目的である。今年は夏山クラスと同様、会話力が大きな課題であった。

文法のテキストとしては、先述の『文法ノート』、ならびに本クラス独自の文法・表現パッケージを用いた。読解の授業では、岡・筒井・近藤・江森・花井・石川『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』（くろしお出版）、先述の『留学生の日本語③』のほか、学生が自分の専門に応じて選んだ記事や小説などの生教材も用いた。

学生たちは真摯で意欲的であり、教員も彼らの要求によく応えた。期末発表は準備に時間をかけ、他の学生にとっても学ぶところが多い発表となった。

「夏空」

本クラスでは、学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足が顕著であり、基本文法を用いた単文が正確に産出できるようにすることを最大の目標とした。

文法の授業のためには友松悦子『初級日本語文法総まとめポイント 20』（スリーエーネットワーク）、読解の授業のためには先述の『留学生の日本語③』『上級へのとびら』を主に用いた。また、『留学生の日本語③』は会話や作文の指導にも活用した。

基本を徹底的に復習するというクラス方針に多少反発しながらも、学生たちは最後まで意欲的に学習に取り組んだ。コース終盤には学生の意見交換も活発になり会話力の高まりが目に見える形で示されたうえ、読解教材として学生が各自の専門や関心に応じて選んだ記事を使うなど、「基礎固め」を超える活動がクラスで展開できるまでになった。

期末発表会のため、担任は学生の書いた原稿に大幅に手を入れざるをえず、指導にも苦勞した。しかし当日はどの学生も堂々と発表し、他の学生の発表にも熱心に質問をするなど、7週間の学習の成果を示した。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートからは、ここ数年のうちでも最高レベルの満足度が伺える。

31名の回答者のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者は20名、Good とした者は10名、Fair とした者は1名、Poor とした者はゼロであった。また、30名³が本コースを他の学生に推薦する意志を表明している。Fair とした（そして本コースを他の学生に推薦しないとした）1名については、本人の達成したい目標と現状の日本語能力とが大きく乖離しており、それをクラス分けに対する不満として表明したものと筆者は理解している。強い期待を抱き、高額な授業料を払って本コースに参加した学生に不快感を抱かせてしまったことは誠に気の毒に思うし、もちろんそれはできる限り避けたい事態であった。しかし一方で、本人の日本語能力を少しでも改善していくため、そして授業の運営に支障を生じないため、今回のクラス配置は不可避の措置であったと筆者は考えている。

校外学習に対する満足度も総じて高い。例年とは異なってクラスごとに朝から自由に鎌倉を見学し、午後に全員が合流して座禅研修（於建長寺）を行った「鎌倉の日」と、例年同様の歌舞伎鑑賞教室（於国立劇場）が特に人気だった。

6 おわりに

今年の夏期コースは、例年とは異なる要素が2点あった。1つは、事前の想定以上に会話力が低い、あるいは基本文法の定着が弱い学生が多かったことだ。これにより、一部のクラスでは扱う教材やカリキュラムの変更を余儀なくされた。コース開始時、教員たちは「今年は『伸びしろ』がある年だね」と、学生の日本語力が大きく向上する可能性に期待したものだ。そしてもう1つは、ここに具体的に記すことはできないが、これまでの夏期コースでは起こらなかった問題に直面したことである。コース期間中、教員室から教員の溜息や呻き声が聞こえてこない日はなかった。たとえば作文の剽窃や代筆、常習的な遅刻や欠席といった、周囲の学生にも悪影響を及ぼしかねない問題行為に対して教員はどう対処すべきか、本センターは機関としてどのような姿勢で臨むべきかが、教員の間で度々議論された。

しかし、コースの総決算というべき期末発表会での学生の発表は、発表後の質疑応答も含め、例年になんら劣ることのない立派なものであった。アンケートから伺える学生の満足度も非常に高い。問題行為に粘り強く対応しつつ、すべての学生の指導と良好な学習環境の維持に力を尽くし、立派な発表を行えるまでに彼らを導いてくれた関係教職員には、この場を借りて深く御礼を申し上げる。期末発表会の成功と今年度受講者からの高い評価は、各位の貴重な努力の証左に他ならない。

毎年ここで述べていることだが、筆者は「7週間、とても勉強になった。しかし、もっと勉強が必要だと分かった。次はぜひ年間コースに参加したい」という感想を学生が持つことが夏期コースの最大の成功だと考えている。上述の困難にもかかわらず、今夏もそのような声を学生から直接に、あるいはアンケートを通じて複数聞くことができたのは、望

外の喜びである。

今後も、優れた学生のニーズを満たす密度の濃い教育と、その意欲を阻害しない良好な雰囲気醸成、ならびに校外学習等の諸活動の充実を追求していく所存である。

(あきざわ ともたろう / 2010～2015 年度夏期コース主任)

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目である SKIP (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは学生の自由選択制としている。
- 2 「夏海」クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2時間目の授業時間を延長し、逆に3時間目(待遇表現)を短縮した。
- 3 ただし、うち1名は「もし学生が会話能力の向上を望み、話す機会と訂正を受ける機会を積極的に求めるなら」という条件をつけた。

資料 : 2015 年度夏期コース 校外学習等

6 月

- 18 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験(筆記、聴解、発話) (9:40～12:00)
- 19 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練 (9:40～12:30)、歓迎会 (12:30～14:30)
- 26 (金) 校外学習① 横浜の日 4班に分かれ横浜市内を見学
A. 日産横浜工場、B. 日本新聞博物館、C. 開港資料館、D. 三溪園

7 月

- 3 (金) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「義経千本桜」(+希望者は国会図書館訪問)
- 10 (金) 中間試験 (9:40～12:30)、校外学習③ 横浜・川崎の日 4班に分かれ横浜・川崎市内を見学 A. 金沢文庫、B. 横浜地方裁判所、C. 原鉄道模型博物館、D. 川崎大師
- 17 (金) 校外学習④ 鎌倉の日 午前中はクラス毎に鎌倉見学、午後は建長寺にて座禅研修
- 24 (金) 校外学習⑤ 東京の日 3班に分かれ東京を見学
A. 警視庁、B. 東京近代美術館、C. 明治神宮

8 月

- 3 (月) 最終試験 (9:40～12:30) 午後は発表会準備
- 4 (火) 口頭発表会 (9:40～14:20)
1人あたり質疑応答を含め15分、関心・専門別に4箇所に分かれ同時開催
- 5 (水) クラス担任との個人面談 (9:40～12:30)、修了式と祝賀会 (12:30～14:30)